

☆三位一体の主日(6月4日)の聖書朗読☆※主任司祭からの解説があります。

第一朗読 (出エジプト記 34章 4b-6、8-9節)

その日、モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりにシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。主は彼の前を通り過ぎて宣言された。

「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ちた者。」

モーセは急いで地にひざまずき、ひれ伏して、言った。

「主よ、もし御好意を示してくださいますならば、主よ、わたしたちの中にあって進んでください。確かにかたくなな民ですが、わたしたちの罪と過ちを赦し、わたしたちをあなたの嗣業として受け入れてください。」

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙II 13章 11-13節)

兄弟たち、喜びなさい。完全な者になりなさい。励まし合いなさい。思いを一つにしなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神があなたがたと共にいてくださいます。聖なる口づけによって互いに挨拶を交わしなさい。すべての聖なる者があなたがたによろしくとのことです。主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 3章 16-18節)

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

今日は三位一体の主日です。父と子と聖霊の神秘をお祝いします。三角形というのは最も安定した形といわれています。唯一絶対の神を表すのにこの三位が使われています。神の存在は確かなことですがその実態は神のみが知っておられる神秘です。聖書はその実態を様々な表現で私たちに表してくれています。もっとも確かなことはイエスが私たちに伝え残して下さった「父と子と聖霊」です。

第一朗読 (出エジプト記 34章 4b-6、8-9節)

ここではモーセに出現される「主である神」の存在が告げられます。それまではおぼろげながら自分たちを導かれる神なる存在が示されてはいましたが、この時からモーセを通して、現わされるのです。他の神々に心傾く人々にこれから先何度も繰り返されるやり取りの始まりです。このようにして、唯一の神の存在が次第に示され、明らかになってゆくのです。

第二朗読 (使徒パウロのコリントの教会への手紙II 13章 11-13節)

父なる神の力、完全さが示されています。「主、主、憐み深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみと誠に満ちたもの」。ここには誰をも寄せ付けず、圧倒的な力を見せつけ、反抗を少しも許さない神の姿はありません。モーセはこの主なる神に言います。「この罪深い民とともにいてください」、「私たちの罪を許し、私たちを受け入れてください」と。後にイエスはこの主なる神を「父と呼びなさい」と教えてくださったのです。主なる神、父なる神の御独り子だからこそ言える言葉なのです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 3章 16-18節)

ここにはイエスを通して語られる父の思いが述べられています。「その独り子をお与えになったほど・・・」、これはアブラハムが神のために自分の

独り子イサクをささげようとしたことを神が「もうよい。」と止められたことに対して、父なる神は独り子イエスを十字架の死に至るまで捧げつくされた人間への愛を言っています。独り子イエスを信じるのがどれほど大切か、神の愛に応えることなのかを述べているのです。また神はイエスを信じない人に対して罰を与えるのではなく、信じない人自らがイエスを信じることによって得られる恵みを拒否するのだと言っているのです。私たちは典礼の暦を通して、神の一人子イエスの生涯と、父と子から出る愛の結晶である聖霊の祝いとおこなってきましたが、この三位一体の主日を通して、私たちに与えられた命の源である父なる神の愛を黙想するのです。三位の神は私たちの生涯を縛ること、また私たちの心をごんじがらめに抑圧することを望んでおられるのではなく、パウロが勧めるように喜び、愛を持って生活し平和を保つことを神は望んでおられるのです。



神の完全さは美のうちにもあらわされる（尾瀬ヶ原 2022年7月）

P.S.

どうやら梅雨に入ったようです。長雨になるのでしょうか、空梅雨になるのでしょうか、どちらにしても大きな災害が起きないことを願わずにはおられません。

カトリック足立教会
主任司祭 野口重光